

2005 年日韓教授統一思想研究会
「現代文化と統一思想」

統一医学の定立とその発展をめざして

鈴木 重裕

札幌医科大学元助手
医師

千葉県浦安市：一心特別研修院

共 催：統一思想研究院 / P A R P 後 援：世界平和教授アカデミー

2005 年 8 月 27 日—28 日

「統一医学の定立とその発展をめざして」

鈴木重裕、M.D. Ph.D.

先日 2005 年 7 月 23 日、第 1 回統一医学定立のための国際学術会議が清心神学大学院国際会議室（清心病院：韓国）において開催された。はじめに大母様から、清平での霊的役事により様々な病気が治った事例を通して、神の心情、親の心情を忘れないで欲しいというメッセージがあった。続いて清心神学大学院の金振春総長から「統一医学と統一健康」と題した発表があり、統一原理に基づいて神学的観点からの健康観がはじめて提唱された。これを契機に、今後、統一医学の定立における医学的なアプローチによる裏付けと実証がなされなければならない。そこで今回、統一医学の定立とその発展のために、医学的観点、特に心身医学の側面から少し述べてみたい。真の健康とは何か。創造原理から考えると、心と体が健康であり、家庭も健康でなければならないという結論を得る。

それではまず第一に、心と体の健康はどのように捉えるべきなのであろうか。西洋医学では、デカルトが心身二元論を唱えて以来、心と体を別々のものとして扱った。そのため、西洋医学は近代科学の中で身体の細部を専門的に研究してきたのである。しかしこれでは心身症やうつ病、神経症、パニック症候群をはじめとして、睡眠障害や摂食障害、性障害などの心身相関の高い疾患や、QOLやターミナル・ケアなどの社会性の高い問題などは解決できないのである。本来人間は心と体が一つになったとき喜びを感じるように、心と体の両面から一体的に捉えていかなければならない。言い換えれば、目に見える世界と目に見えない世界があるという視点から世界を見つめ人間を捉えていかなければ、真の意味での健康を得ることはできないのである。

そこで、東洋医学の「心身一如」の発想をもった心身医学が登場し、新しい健康観が示された。エンジェルは「医療は患者中心のものとして行われる必要がある。そのためには身体レベルのみのアプローチだけでは不十分であり、幅広く総合的で全人的側面からのアプローチが重要である」とし、生物学的、心理的、社会的、倫理的、霊的な健康モデルを提唱したのである。

それでは心と体の関係はどのようになっているのであろうか。統一原理では心と体の関係を、肉身と霊人体の関係で説明している。これは物質と非物質の関係を意味する。量子力学がこの問題を扱い、その結果、宇宙にあるすべての存在には粒子性と波動性という二重性が存在し、この両者には相補性、互換性があるということを明らかにしてくれた。言い換えると、すべての存在には波動性をもつ内性（性相）と粒子性をもつ外形（形状）が存在し、それらは互いに相対的關係を結び調和をなしているということである。

次に、心（意識）と脳の関係について述べてみたい。この点について科学はまだ明確な結論を出すほどにまで進んでいない。しかし、大脳生理学の様々な研究結果から見てもわかるように、心を脳に還元することができないため、心はいわばプログラマ

一、脳は入力された情報に従って、迅速かつ正確に作動する精巧なコンピューターにすぎないとの見方が主流になってきている。即ち「心は脳を超えている」ということなのである。それでは、その心、あるいは意識自体はどこから発しているのだろうか。ペンフィールドによれば、「意識を支える不可欠の実体は大脳新皮質以外の部分、おそらくは間脳に位置している」という仮説を提唱している。実際に、大脳新皮質の機能を引き起こす神経伝導路は、みな間脳に始まり間脳に終わっているのである。これについては賛否両論があるが、ただここで、人間の言語作用が大脳新皮質の言語領からではなく、間脳から始まっているという点は非常に重要だと思われる。これはつまり、言語を生じさせる「心」が間脳から発することを意味しているからである。間脳こそ脳の中核と言えるかもしれない。実際に、大脳新皮質は前頭連合野を含めた広範囲の切除が行われても意識が消滅することはないが、これに対し、間脳は一部が傷ついたり、電氣的刺激で働きが妨げられただけでも、意識の完全な消失を招くことが立証されている。

間脳は主に「視床」からなり、視床下部・下垂体・松果体を含めた総称であるが、ここから脳が左右に分かれ二極分化が始まっているのである。しかも間脳には振動が10の40乗以上の周波数を感じるセンサーが存在し、特に下垂体、松果体は「心の底」と言われ極微の波動に極めて敏感である。また大脳新皮質の前頭葉（右脳）は振動が10の30乗以上の周波数を感じずる器官であるとも言われている。それではイメージ（見えないものが見えること）がなぜ可能なのか。それは、右脳にはすべての波動に共調・共振する働きがあり、共振するとその波動情報が右脳のイメージ変換力でイメージ化されるからである。よって「見える」ということは、目という器官で物を見ているのではなく、実は間脳を起点としながら右脳のイメージ力によって物を見ているのである。また間脳は右脳とともに潜在意識の形成に関与していることがわかっている。

ここで、間脳から発する心身異常として、睡眠障害とうつ病に関する研究例を取り上げてみよう。（この研究は *Journal of Pineal Research* に掲載され、第10回世界産婦人科心身医学会で発表した。詳しい内容は論文に譲る。）発表の趣旨は次の通りである。つまり、睡眠障害の潜在的な原因として、サーカディアン・リズムの異常がある。そのリズムを作り出す中枢は間脳の視交叉上核（SCN）であり、その指令によって松果体ホルモンであるメラトニンが内因性生体リズムをもって分泌される。一方、下垂体ホルモンであるTSHやストレスから生体を防御する副腎皮質ホルモンであるコルチゾールは睡眠の状態依存性を示すが、各ホルモンの分泌された領域（AUC）におけるメラトニンとの比率によって、睡眠障害における不眠群と良眠群の鑑別、さらに単純な睡眠障害とうつ病に伴う睡眠障害とを鑑別することが可能になり、特にTSH／メラトニン比（領域比）が診断的価値をもつことが示唆された。このことは間脳には自律性をもった中枢があり、睡眠障害やうつ病のように、心身両面に関わる病気の多くは間脳から発していることを改めて裏付ける結果となった。

統一原理によれば、肉身は肉心と肉体からなっており、霊人体は生心と霊体からな

る。肉心は肉身の主体的な部分であり、肉体の生存、繁殖、活動のための生理的な機能を主管する。従って、肉心の機能は食欲、性欲、睡眠欲などの本能作用を主管しており、これは間脳の働きそのものなのである。一方、生心は人間の永遠の生命と愛と理想を主管する霊人体の中心である。生心の機能は真、美、善、愛などを求め、価値ある生活をするように作用する。生心は神が臨在される霊人体の中心であり主体であるが、この生心はまさしく、間脳から発した心が右脳の感性（イメージ）によって共振・共鳴によって高められた意識そのものなのではなからうか。

第二に、家庭の健康について述べてみたい。その中で最も重要なのは夫婦のあり方であろう。宇宙はペア・システムになっている。東洋の哲学でも陽陰の思想があるが、人間社会も本来夫婦が一つになっていけば大体の問題は解決するのである。よく子供による事件が多発しているが、この原因も家庭環境が影響している。子供は敏感に家庭環境を察知し、親の影響を受けやすい。即ち、夫婦の関係がうまくいっていないと、子供に十分な親の愛が届かず、子供の心の発育にも影響を及ぼすということである。実際に、3歳まで「親から愛された」という実感を伴った経験がなければ、感情や情動の発現に関与する大脳辺縁系の成長が阻害されるという報告がある。

以上、統一原理の医学的な側面について触れてきた。そして、病気の克服と健康増進のためには、西洋医学と東洋医学の和合に加え、補完・代替医療を含めた統合医学が一般的になりつつある。しかしここで忘れてはいけないことがある。それはなぜ病気が生じるのかという問題である。清心病院での過去の治療状況によると、病気の約70%は、特に精神病はほぼ100%が霊的要因によるものであったということである。病気とは、生体維持機能つまり間脳機能の異常であるとも言える。この異常によって生体を維持していくための自律神経系、ホルモン系、免疫系、血液循環器系、代謝系などに異常が生じる。潜在意識のもつ波動は間脳や右脳の機能と密接に深く関わり、細胞レベル、DNAレベルに至るまで強い影響を及ぼしている。この潜在意識を病的にする要因とは何か。病的とは「宇宙の法則性に反する行動や考え及びそれらを誘発すること」を言い、宗教的にはこれを「罪」と言うが、これは「無知」によって引き起こされたものである。これには否定的考え・否定的感情・否定的情動、例えば不平、不満、怒り、嫉妬、恨み、他人を否定する心や破壊的な気分、恐怖、不安、自分の価値を否定する心、自責の念などによる直接的要因（自犯罪）と、間接的要因、即ち先祖から伝わるもの（原罪や遺伝罪）や人類という連帯的な因縁によって生じるもの（連帯罪）などがある。これらの病的な潜在意識（罪）の清算なくしては真の健康は得られない。また人類始祖の墮落以来発生した自己中心的な「墮落性本姓」から生じる心の葛藤をも克服しなければならないのである。こうした霊的な問題を解決する霊性治療を含めた医学が今、求められている。

統一医学は、墮落によって生じた肉身の病気を治療するだけではなく、東西思想の統一に立脚した、東洋医学と西洋医学の和合を通じて心の葛藤までも治すという次元で定立され、そして発展しなければならないと考える。